

山家悠紀夫『景気とは何だろうか』岩波新書、2005 年

第 3 章 戦後日本の景気循環（1）

○問題提起

P77 の表 3-1 で、景気の谷から山への拡張期間が、山から谷への後退期間よりも長くなっている（第 9 循環を除く）ことがわかるが、これは政府が意図してこうなったのか、それとも自然にこうなったのか？

選んだ理由

拡張期間が長いほうが景気が上向きになっていて良いのではないかと考えて、景気を政府はきちんとコントロールすることができているのか、コントロールするにはどんな要因が必要なのか意見を聞きたいと思ったから。

A

P79L14 に「後退期間の終了は過剰在庫の調整の終了という市場本来の要因によるところが大きい」と書いてあり、政府が意図して介入したとしても、後退期間の長さの違いによって現れる程度は小さいと見ていい。後退期間は自然になったもの。

B

拡張期間の終了には政府が介入していた。しかし後退期間は自然である。理由は p.79 に「後退期間の終了は……市場本来の要因によるところが大きい」とあるから。また、ニクソンショックやオイルショック等の海外要因の影響もある。拡張期間が後退期間よりも長かったのは、金融緩和が行なわれたからである。

C

拡張期間は基本的には政府の意図でこうなったのだと思うが、外国の情勢や石油危機等により政府が意図したものではない場合もある。

D

政府が意図して後退期間へ誘導させたものの 後退期間の長さは自然的なものだ と思う。市場のメカニズムから考えると、今回挙げられている後退期間の平均 17 ヶ月は好景気による過剰在庫の調整期間として政府が意図して行ったと思う。好景気の際は、過剰供給による景気の悪化が予想される。自由に放っておいておくことで景気はいつそう悪くなる。政府はそれを防ぐために対策を打った。